

愛視協だより

発行 愛知県視聴覚教育研究協議会

事務局 名古屋市東区東桜1-13-3

NHK名古屋放送局内

TEL (052) 952 - 7293

第60回 東海北陸地方放送教育研究会 第54回 愛知県放送教育特別研究大会

研究主題 「未来を拓く学びの場を創造しよう」



期 日 令和4年8月26日(金)
会 場 ウィンクあいち(映像配信、オンライン会議)
主 催 NHK名古屋放送局・全国放送教育研究会連盟
東海北陸地方放送教育研究協議会
愛知県視聴覚教育研究協議会
共 催 NHKサービスセンター
後 援 文部科学省・厚生労働省・内閣府
愛知県教育委員会・名古屋市教育委員会
名古屋市教育会

第54回愛知県学校視聴覚教育研究大会 名古屋市情報教育研究会研究発表大会

研究主題 「子どもたちの学びの核となる情報教育
—生涯に渡って主体的に活用できる情報活用能力の育成—」

日 時 令和4年10月18日(火)
場 所 名古屋市教育センター
講演会 講師 茨城大学 准教授 小林 祐紀 氏
演題 「ICT活用を通じて授業改善を実現するために
—情報活用能力を見据えて—」

令和の日本型学校教育の構築

— 主体的・対話的で深い学び —

講師

國學院大學人間開発学部初等教育学科教授
文部科学省視学委員

田村 学 氏

21世紀の社会（Society5.0）における新しい学びを考えていく必要がある。これからは、教師が身に付けさせる・教師が学ばせるといった教師中心から、子どもが自ら身に付ける・子どもが自ら学ぶという子ども中心の考え方に発想を転換しなければいけない。

令和3年1月26日付中教審答申で「令和の日本型学校教育の構築」が示された。資質・能力の育成に向けて期待される学びとして、「主体的・対話的で深い学び」とする能動的な学習から「個別最適な学びと協働的な学び」とする一人一人に応じた学習へと重点を拡充していく。個別最適な学びとは、子ども一人一人がタブレット端末をもち、確かな実力を身に付けるといった指導の個別化（習得）、子ども一人一人の思いや願い、課題意識、意欲を大切に、タブレット端末を使った学習の個性化（探究）である。また、それらを深めるためにも、協働的な学びは欠かすことができない。



深い学びをする子どもの姿でキーワードとなるのは、つなぐ・つながる・つなげるという知のネットワーク化であると考えられる。知のネットワーク化には、「部分の結合」と「中核との結合」という2種類などがある。「部分の結合」とは、事実的で個別的な知識から概念的で構造的な知識へとつなげていくことであり、「中核との結合」とは、中心概念があり、そこに事実がつながっていくというネットワークのことである。技能に関しては、パターン化して一つずつの技能を身に付け、身体化していくことで技能が向上する。それをつなげていくことで、知識・技能が生きて働くものとなる。

次に、思考力・判断力・表現力を高めるためには、自分もっている知識を活用し、場面や状況によって自在に使えるようにしていく必要がある。知識・技能を場面や状況とつなげることで、未知の状況で活用できるようになる。

子どもの学びに向かう力は、学びを人生や社会に生かすことで学びの手応えとなり、より授業が、より学校が好きになる子どもを育成することにつながる。教師が子どもたちに知識を与えたとき、子どもたちが「すごいな」「わくわくする」といった感情をもつことにつながれば、それが新たな知識として子どもの力になり、知識・技能が目的や価値、手応えへとつながる。深い学びとは、知識・技能が関連付いて構造化されたり身体化されたりして高度化し、駆動する状態に向かうことである。

そのためにも、望ましい学び合いの場を設定する必要がある。子どもが自問自答し、問い続けるために、興味・関心をもつような学習対象・学習活動を設定すること、発問の工夫による教師の働きかけ、それに対して質問できる子どもの関係性が大切である。また、子どもにどれだけ音声言語と文字言語で表現させるかが重要である。そうすることで、頭の中の一つ一つの知識がつながり、場面や目的に応じて表現することができ、複雑に絡み合った「知識の構造」ができ、知識が失われにくくなる。活用・発揮して情報を処理することで、長期記憶にもつながる。

主体的な学びとは、自分の学びをコントロールすることができることである。対話的な学びとは、異なる多様性のある他者と対話することである。深い学びとは、一つ一つの知識をネットワーク化することで新たな知識にしていくことである。だからこそ、授業の終わりには、振り返りがとても重要になってくる。何を知ったのか、何が分かったのかという事実の確認をし、それぞれの知識の関係性を捉え、一般化することに取り組むことで、自分を見つめなおし、自分の内面が変化し、自己変容を認識することができる。そのためにも、子どもたちに、文字言語による一定の長さの記述に丁寧に取り組ませることが大切である。

そして、振り返りをさせるときには、必ずこの授業でこういった資質・能力を育てたいかということを教師が考えた上で、子どもたちに取り組ませていくことが重要である。

提案者 児玉 雅人（刈谷市立住吉小学校）

助言者 杉山 祐子 氏（中部学院大学短期大学部幼児教育学科）

提案では、算数の文章題に親しみをもち、試行錯誤しながら取り組む子どもの育成をねらった実践が報告された。基本的な計算問題については苦手意識が少ないものの、文章題には苦手意識があるという子どもたちの姿に着目し、プログラミング学習を関わらせながら算数の文章題に対する意識の変化をねらった。

手だての一つ目は、「文章題の動作化」で、文章題に合うアニメーションを教師が制作し、補助教材として提示することである。手だての二つ目は、「問題を解き合う表現活動」で、プログラミングソフトを使って子どもたちが問題場面のアニメーションを制作して解き合うことである。どちらの手だてともプログラミングソフト「ビスケット」を活用した。

一つ目の手だてでは、文章題に苦手意識がある子どもたちのつまづきを教師が想定し、それに合わせた複数のアニメーション教材を用意しておくことで、子どもたちの思考を助けることができた。二つ目の手だてでは、グループで考えた文章題の場面の様子を子どもたちがビスケットで作成し、それを他の子どもたちが見てその文章題を推測するという活動に取り組むことで、文章題に親しみをもち、子どもたちが活動の中で試行錯誤する姿も多く見ることができた。

助言者からは、提案を受けた部会の参加者が「プログラミング学習」「学びに向かう姿勢、意欲」「場面の動作化」などの言葉を実践から連想したことから、それらを反映させた主題、副題にするとよいという助言をいただいた。また、「感じる心」とは「体験により発生する感性、感受性」のことであり、子どもは出会ったものの全てに心動かされ、それが思考力・判断力・表現力の基礎となることや低学年での学習体験が、生涯学習につながるような生きがいを見つける基となることを示唆していただいた。AIが高性能化しているからこそ人間らしさに着目すべきであり、「感じる心」を育てる教師の役割として「なぜと問い掛ける」「総合的な判断能力を発揮する」「思いやり、情熱、欲、迷いなどの人間らしい心を大切にすること」が挙げられると助言をいただいた。

提案者 提案1 稲田 一哉（金沢市立花園小学校）

提案2 阪野 智洋（常滑市立常滑東小学校）

提案3 渡邊 貴之（名古屋市立桶狭間小学校）

提案4 丸山 滉介（新城市立八名中学校）

助言者 山中 修一 氏（東海市立富木島中学校）

提案1では、特別支援学級の児童が、自分自身の思いや考えをもてるようにNHK for Schoolの道徳番組を使った実践が報告された。二律背反の対立構造が分かりやすい動画を視聴することで、登場人物の立場と自分を重ね合わせて意見を考えやすくなり、自分なりの理由を説明することができるようになった。学習に対する集中力の向上にもつながった。

提案2では、自分なりの疑問を発見し、ねばり強く追究しようとする児童生徒を育成するために、Google Workspaceやデジタルコンテンツを活用した実践が報告された。木材加工の学習で短い模範動画を視聴することで、生徒が自分のペースで学習したり、互いの作業動画を確認し合うことで自己の活動を客観的に見たりすることができていた。他には、算数におけるJamboardを活用した実践と国語におけるカタカナをゲーム感覚で学ぶ実践などが報告された。

提案3では、プログラミング的思考を働かせ、よりよい方法を求める子どもを育てるために、NHK for Schoolのプログラミング番組「テキシコー」を活用した実践が報告された。頭の中で試行錯誤を重ねていく流れを動画視聴することで、手順を考える良さを感じることができた。また、グループごとにフローチャートを活用して、自動ブレーキを有したロボット作成などの活動に主体的に取り組むことができた。この実践を通して、順序立てて物事を考える力がつき、試行錯誤する大切さに気付くことができた。

提案4では、社会的な見方・考え方をもち自分なりに説明することを通して、課題を主体的に解決しようとする生徒の育成を目指した実践が報告された。ミライシード（共同編集・プレゼン資料作成アプリ）を活用し、水に関する問題をテーマとしてアジア地域の干ばつなどを調べる中で、お互いに意見を出し合って活発に活動を行い、知りたいことを深く追究することができた。

助言者からは、読みもの資料や動画の活用は児童の興味や集中力を持続させ、能動的な発言を引き出すことに有効であるという助言をいただいた。また、プログラミング的思考については、考えるだけでなく実行することでより学習効果が深まり、その中で協働の学びができることなど、デジタルコンテンツの活用の必要性について助言をいただいた。タブレット端末に関しては、どのように課題をつかませ、どのように実践させるかという教師の導き方による活用が重要であること、また、動画の撮影や視聴に関しては、授業計画の上で時間の使い方を考えること、デジタルコンテンツの活用とともに、紙と鉛筆の学習も大切にすることなどの課題についても示唆いただいた。

- 提案者** ▶ 提案1 飯田 元秋（稲沢市立牧川小学校） 提案2 杉山 雄紀（名古屋市立西城小学校）
 提案3 マッキュー 和加子（福井市立清水南小学校）
 提案4 来川 知裕 木股 和希（知立市立知立小学校）
- 助言者** ▶ 赤杉 巧司 氏（豊田市立幸海小学校）

提案1では、タブレットPCの使用場面に応じた授業計画を立てるという実践が報告された。児童は、タブレットPCを使用するために必要な知識・考え方を学ぶということで、意欲的に学習に取り組むことができた。授業で活用したワークシートに、授業中に見た動画を再び視聴できるようQRコードをつけ、家庭との連携を図る工夫がされた。

提案2では、情報モラルに関することを自分事として捉えられるように、アンケートから実態を把握し、必要性の高いものを連続して学んでいく計画的な情報モラル授業が行われた。OPPシート（学びの過程が一目で分かるように1ページに集約された授業カード）を用いることで、学びをいつでも繰り返し振り返ることができ、授業のまとめに活用された。

提案3では、情報活用能力とメディアリテラシーの向上を目指した実践が報告された。学校や地区全体で学習カリキュラムを見直し、ICTを用いることでより効果的に学びを深められる授業場面を、検討・精選していた。「タイピングスキルアップ」や「他学年交流による教え合い」など、多岐にわたる授業カリキュラムは、児童の情報活用能力の向上が確実に見られるものになっていた。

提案4では、デジタル・シティズンシップ教育の実践が報告された。「ステップアップルール&テスト」という、ICTを扱う上で考えたいことを段階的なテスト形式にし、合格することでタブレットPCなどの制限が解除されていくという実践に学校全体で取り組み、児童の意欲向上につながっていた。

助言者からは、今後の教育現場では、情報モラルからデジタル・シティズンシップへの移行が重要だという助言をいただいた。今までの資料をもとに、子どもが「どうしたらよいのか」といった活用の仕方に目を向けさせることが肝要であるとのことだ。すべてを大人が教えるのは無理な時代である。子どもが自ら学び考え行動していけるような視点が教師に求められるとのことだった。



- 提案者** ▶ 提案1 長谷川 裕（愛知県立東海樟風高等学校） 提案2 大竹 生真（愛知県立国府高等学校）
 提案3 水嶋 俊光（福井県立武生東高等学校）
- 助言者** ▶ 中村 羊大 氏（愛知県総合教育センター研究部経営研究室）

提案1では、生徒がICTを利用して地域課題の解決に挑戦した事例が発表された。一年かけて地域課題の問題を発見、解決するまでの計画・実践であり、複数グループで別々の課題に取り組むというものである。取り組み事例として「遊具にAI機能を組み込む研究」や「小学校における放課後児童クラブの問題解決」があった。今回の提案では、放課後クラブの出席チェックに紙媒体が利用されていたため、QRコードを利用して電子化をした。技術的な部分はTeamsで生徒がマイクロソフト社に質問できるという環境を構築し、一年をかけて問題を解決することができた。

提案2では、愛知県立国府高等学校に一人一台タブレットが先行導入された活用事例が報告された。導入当初より全校生徒にタブレットを貸与して学校内外で活用しており、生徒への利用説明、アプリケーションの設定等の時間をとり、学校全体で対応していることが大きな特徴であった。以前から活用していたClassi、さらにTeams、ロイロノートなどのアプリケーションを、コロナ禍の中、それぞれの強みを活かして柔軟に使い分けて活用していた。対面授業が増えるにつれて、使用頻度が下がっていることも校内の調査結果からわかってきたが、生徒が自主的に部活動の分析に活用するなど新たな利用の側面も見えてきた。

提案3では、オンライン国際交流の実践例が紹介された。福井県立武生東高等学校は、普通科＋国際科という特色があり、国際科は海外に留学する機会があったが、現在はコロナ禍のため、Zoomなどの情報メディアを効果的に活用したオンライン国際交流を実施している。その活動の中で、国際交流で重要なこと「国際交流に興味をもっているだけではだめ」「話を聞いているだけではだめ」「自分から動かないとだめ」という3つのことが明確になったことは一つの成果であった。国際的なことに興味をもっている生徒が入学しているにもかかわらず、卒業後、海外に行く生徒が少ない原因が、本研究により明確になったことは大変有意義なことであった。

第26回視聴覚教育総合全国大会 第73回放送教育研究会全国大会

大会テーマ 「未来社会に向けて生涯にわたる学びを支えるメディア活用」

期 日 令和4年11月12日（土）

今年度もオンライン開催（3回目）となり、様々な場面でのICT活用が進む中、教育活動にも大きな変革の波が到達している。そのような情勢の中、セミナー3講座、ワークショップ4講座、16実践の発表とミニ講演と内容もかなり充実した開催となった。

GIGAスクール構想に対応した各校種での実践やセミナーにより、参加者がより身近に課題を感じ、実践してみようと考えられる内容となった。

第54回愛知県学校視聴覚教育研究大会 令和4年度名古屋市情報教育研究会研究発表大会

日 時 令和4年10月18日（火）

研究主題 子どもたちの学びの核となる情報教育
—生涯に渡って主体的に活用できる情報活用能力の育成—

講演会 講師 茨城大学准教授 小林 祐紀 氏
演題 ICT活用を通じて授業改善を実現するために
—情報活用能力を見据えて—

概要

(1) 講演

子どもたちに「基礎的リテラシー」や「認知スキル」、「社会スキル」を身に付けさせるために、「ミニ探究的な学び」が有効であり、情報活用能力は教科の枠を超えてすべての学習活動の基盤として育まなければならないとの話があった。学びを探究的なものにするためにGIGAスクール構想を活用することが重要であり、子どもたちにどのような力を身に付けさせたいのか教師がしっかり考える必要があると話があった。また、質の高い振り返り活動が必要であり、自己調整できる能力が不可欠であるとも話があった。

(2) 研究発表

小学校4年生社会科と総合的な学習の時間を横断した、「自然災害から暮らしを守る～地震から暮らしを守る～」をテーマに進められた実践について発表があった。社会科で学習した「共助」の考え方を基に地震を自分事として考え、家族や地域の方に防災について分かりやすく発信することを狙った実践だった。

GIGAスクール構想によって整備された学習者用タブレット型PCを活用した情報収集では、オンラインで直接経験者から話を聞いたり、思考ツールを活用したりすることで考えをまとめ、「思考の見える化」を進めた。そのため、児童はそれぞれの学習テーマにしっかりと迫ることができた。集めた情報を基に、自分なりに分析（なぜなぜ分析）を行い、自らの予想や話し合いに役立てた。最終的には独自のハザードマップを作成することができた。できたハザードマップを活用した防災リーフレットを地域や関係者に公開し、また、市役所の防災・減災コンサートのパンフレット展示もできた。

第39回 NHK杯 全国中学校放送コンテスト愛知県大会

令和4年7月2日（土）NHK名古屋放送センターにてデータ審査で開催

7月2日（土）県下から多数のエントリーを受け、録音・データ審査にて第39回NHK杯全国中学校放送コンテスト愛知県大会が行われた。「ラジオ番組部門」3作品「テレビ番組部門」5作品「アナウンス部門」28名「朗読部門」30名のエントリーがあり、これまで培ってきた力を出し切った成果を競い合った。結果は、下記のとおりであった。

ラ ジ オ 番 組 部 門

優 秀 名古屋市立神丘中学校
「スマホとわたしとそれからあなた」
優 良 名古屋市立大曽根中学校
「こんな時、あなたならどうする？」
入 選 岡崎市立新香山中学校
「ウクライナで起きている悲劇」

テ レ ビ 番 組 部 門

最優秀 名古屋市立神丘中学校
「文房具の気持ち」
優 秀 日進市立日進中学校
「伝統バトンタッチ？」
優 良 椋山女学園中学校
「リボン、結べますか？」

朗 読 部 門

最優秀 日進市立日進中学校 宇 都 紗英子
優 秀 日進市立日進西中学校 岡 田 奈 々
名古屋市立神丘中学校 橋 桃 香
優 良 名古屋市立神丘中学校 大 原 あずさ
金城学院中学校 照 屋 陽七海
南山中学校女子部 山 口 愛 美
入 選 名古屋市立神丘中学校 青 木 こころ
名古屋市立神丘中学校 恒 川 夕 葵
日進市立日進中学校 安 藤 果 音

ア ナ ウ ンス 部 門

最優秀 名古屋市立神丘中学校 水 城 花 蓮
優 秀 椋山女学園中学校 高 木 宥 里
南山中学校女子部 早 野 花 歩
優 良 名古屋市立神丘中学校 北 浦 心 晴
金城学院中学校 中 村 朱 那
名古屋女子大学中学校 福 家 安柚美
入 選 南山中学校女子部 上 村 梨 乃
名古屋女子大学中学校 武 田 め い
金城学院中学校 安 藤 瑠 南
椋山女学園中学校 酒 井 愛 菜

第38回 NHK杯 全国中学校放送コンテスト全国大会

予選 令和4年8月8日（月）

決勝 令和4年8月17日（水）

会場 千代田放送会館

全国大会では、県大会で優良賞以上が全国大会にデータでエントリーし、次のような素晴らしい結果を残した。

朗 読 部 門

入 選 南山中学校女子部 山 口 愛 美